

特別寄稿

人生の真実は細部に宿る

——陳柔縉さんの『日本統治時代の台湾』を読んで

拓殖大学学事顧問
前総長

渡辺利夫

本書の原題は『人人身上都是
一個時代』である。「人は皆それ
ぞれ自分の時代を生きてきた」
といった感じか。日本統治時代
の台湾のことを日本人が語る場
合——朝鮮や満州のことを語る
時にはもつとそうだが——には、
どうしても「権力」とか「植民」
とかいった観念がつい先に立つ
てしまい、日本人の心には少し
重ったるい負担感がある。陳柔
縉さんもそのことはよく知っ
ている。しかし、好くも悪くし
も、ともに五十年を過ごしてき
たのではないか。辛いこともあつ
たが楽しいことだっていっぱい
あつたはずだ。少なくとも台湾
人がそう感じているらしい。

東日本大震災時には台湾の人
びとが心から悲しみ、多額の義

捐金でその心を日本に送ってく
れた。「その行動の源にあつたの
はきっと、台日両国の人びとが
ともに過ごした五十年の交流の
記憶だつたのではないか」と陳
さんはまえがきで記す。この一
文に出会ってわけもなく私の涙
腺は緩む。

歴史というものは、有名な英
雄がつくり出すものではなく、
それぞれ名もなき住民が日常生
活の中で紡ぐ多くのエピソード
の集積なのだ、という陳さんの
思想から本書は生まれた。日本
時代を偲ばせる小さな新聞記事
に目をとめ、日本時代に生きた
人びとが細々と語るエピソード
に耳を傾けて、陳さんはそのデ
ィテールの中に歴史の真実を知る
手がかりをみつけ、巧まざるユー

モアを交えながら、軽やかに日
本統治時代の台湾の細部を描き
込んでいる。その筆使いの、実
にうらやましいほどの闊達さに
促されて、私は本書をあつとい
う間に読み終えてしまった。

市井の人々の織りなす、別に
特筆するほどのことでもない
振る舞いが、陳さんの手にかか
ると、いかにもリアリティを
もつショートショートとなつて
読者の前に姿をあらわす。そ
う、ひよつとして本書は、日本
時代に生きた台湾人のショート
ショートのコレクションなのだ。
台湾人がエレベーターという
ものを初めて目にし、エレベ
ーターガール（「エレガ」）に憧れ
たこと、食うに困った泥棒が書
き置きを残して日用品を盗み出

したこと、許されぬ恋に身を焦
がす二人が心中をはかったこと、
これらはいずれも私の少年時代、
日本の故郷で見聞きしていたこ
ともある。台湾人も日本人も、
つまりはともに暮らした統治時
代の人びとも、同じようなことに
絶望し、同じようなことに歓喜し
ていたのだ。人間て、そんなに簡
単に変わるものじゃないんだよ、
という陳さんの声が聞こえる。

陳さんは本書原書によって台
湾政府から二〇〇九年のノン
フィクション部門の出版賞「金
鼎賞」を授かったという。さも
ありなんである。本書では、陳
さんの中国語をその綾を少しも
そこなうことなく、みごとな日
本語に移し換えた訳者の天野健
太郎さんの貢献も随分と大きい
のだろう。

国家基本問題研究所の日本研
究奨励賞のご受賞に心からの祝
意を申し述べ、一層のご精進を
お祈りするばかりである。本当
におめでとうございます。